

Innovation TOKYO for 2020 and beyond

～対話から新しい東京のかたちを探る～



INNOVATION
NIPPON

第3回「まちなかでの休む」を楽しみやすく

～健康をささえる「憩いの場」の確保と共有化を考える～

開催レポート（速報版）



日時：2015年11月25日（水）18:00 – 21:00

会場：SHIBAURA HOUSE（東京都港区芝浦3-15-4）

2015年11月25日、東京都港区のSHIBAURA HOUSEにおいて、Innovation Nippon¹主催「Innovation TOKYO for 2020 and beyond ～対話から新しい東京のかたちを探る～」の第3回イベントが開催されました。

本企画は、2020年に開催されるオリンピック・パラリンピックとその先の時代を見据え、国際化・スマート化・高機能化・快適化といった、東京の街のアップグレードにおける効果的なイノベーションのあり方を検討するワークショップシリーズです。第3回目は「まちなかでの休む」をテーマに、公共空間と私的空間ともに、まちなかで気軽に使える休憩場所はどこにあるとよいか、またどのような機能があるとよいか、すこし体調がすぐれな

¹ グーグル株式会社と国際大学グローバル・コミュニケーション・センターが共同で立ち上げた、日本におけるICT活用のイノベーションを推進するプロジェクト。

いときに元気を取りもどす場所、といった観点もふくめた「憩いの場」の可能性について、参加者の皆様と対話を進めました。

参加者は、一般企業、省庁・自治体、各種団体に所属される社会人と学生を含め、25名が集まりました。「休む／憩いの場」に業務で関わる方、2020年東京オリンピックに向けた活動をしている方、IT関連の仕事をしている方、また本ワークショップシリーズに連続で参加した方など様々なメンバー構成となりました。

【問いを共有する】

プログラムのはじめに、主催者である庄司昌彦（国際大学 GLOCOM 主任研究員）と南万理恵（グーグル株式会社 公共政策部 シニアアナリスト）による挨拶とイベント開催の意義について共有されました。庄司は、本ワークショップの会場である SHIBAURA HOUSE も企業のオフィスビルの一部を地域に開放したスペースであることを紹介しつつ、「パブリックとプライベートの境目を自由に変えながら空間を活用できるような、2020年とその先の未来の都市のあり方について考えていきたい」と第3回テーマの企画趣意を述べました。

南は、2013年から活動を開始した Innovation Nippon が、日本の ICT 活用とイノベーションに関する調査研究から政策提言等に結び付けることを目指したプロジェクトであることを説明したうえで、「より多様な方々と、テクノロジーの可能性を活かした多様なアイデアを生み出すことを期待して、対話の場を設けました。参加者それぞれが普段の業務や経験を、互いに共有しあうことによる化学反応に期待しています。」とワークショップ形式を採用した背景と、新しい試みへの期待について触れました。



次に、ファシリテーターである野村恭彦（国際大学 GLOCOM 主幹研究員／株式会社フューチャーセッションズ代表取締役社長）から、「まちなかでの休む」について対話を開始する前のウォーミングアップとして、参加者ひとりひとりにとっての「休む」にはどのようなものがあるかをシェアしてみようと提案がありました。

- ・ コーヒーやお茶を飲む、甘いものを食べる
- ・ 移動中、電車内で過ごす、自転車に乗る、散歩をする
- ・ 趣味の時間を過ごす、座禅をする
- ・ オフラインのとき／オンラインのとき 等

それぞれの「休む」の概念について、多様なコメントが集められました。そして現在の私たちの「まちなかでの休む」の概念がオリンピックを経た 2020 年代にどう変わり、拡大していくかについて考えてみる場であることを参加者全員で認識しました。

さらに野村は、本ワークショップはフューチャーセッション形式で進めていくことについてのグラドルールを説明し、現在から未来を予測するフォーキャスティングではなく、未来から振り返り予測するバックキャスティングの「未来思考」こそが、不確実ではあるがインパクトの大きいことを発想する際に重要であることと、お互いの「休む」のニーズをお互い理解して気づきのある対話を進めていこうというひとりひとりの想いを大切に、お互いの違いや多様性から学ぶことの重要性について述べました。



【変化の兆しを集める】

グループ対話 1：2020 年代までに「まち」に「ありうる変化」は？

（ポジティブもネガティブも、ワイルドなものも）

グループ対話は、2020 年代までの近未来にありうる変化についてグループメンバーごとにアイデアを出し合い、配布された模造紙に自由にメモ書きをすることから始まりました。高齢者や外国人が増えるといった人口構造が変わること、それに伴い価値観の多様性が生まれる反面、混乱が生じる懸念があること、何らかの新しい制度やルールが必要になる等、さまざまな意見がテーブルごとに飛び交いました。



インスピレーショントーク

「まち」に「ありうる変化」を想定したところで、次に「まちなか」での「休む」を楽しむ上で、フレッシュな視点を与えてくれる有識者・実践者として、参加者の中から代表して2名が登壇し、自身の活動・取り組み内容が共有されました。

●城守 正人さん（森ビル株式会社 タウンマネジメント事業部）

2014年に東京都港区に開業した虎の門ヒルズは、オフィス、ホテル、住宅、大型会議室など多様な機能を有する複合型施設としての再開発プロジェクトです。また、ビルの真下に環状二号線の地下トンネルを通すことで、地上の道路空間を有効活用することを狙った道路と市街地の再開発事業となっています。タウンマネジメントという観点から、地域の方々や、政府自治体といった様々なステークホルダーと対話・交渉を重ねながら道路空間の新たな活用方法を実現すべく活動を推進する城守氏は、その可能性と課題について以下のように参加者と共有をしました。まず、新設される地上道路は、約950名もの地権者との権利調整により誕生し、表参道とほぼ等しいおよそ760mの区間でありながら、その片側の歩道幅が13mの広さとなっています。「新虎通り」と名付けられたこの新道は、車両の通行量を地下トンネルに分散することで、地上はよりにぎわいのある空間としての様々な活用可能性が検討されています。城守氏は、地域の方々とともに「新虎通りエリアマネジメント協議会」を発足させ、歩道上のオープンカフェ設置に向けた活動や、NPO法人と連携した清掃活動、通りの名称ロゴを開発するなどの、取り組みを行っています。さらには、道路内建築、屋外広告、各種イベント実施の可能性への協議やパーソナルモビリティ活用の社会実験等も進めています。



ただし、これらの各種活用アイデアの実現に向けては、自治体（東京都建設局、政策企画局、都市整備局）、政府（内閣府）、警察等が個別に定める各種の道路占有許可等の届け出が必要となっていて、実際には数多くのハードルが存在していること、実現の難しさを感じながらの活動であることも共有されました。

最後に、未来の都市に向けた新しい取り組みの方向性についても紹介されました。ひとつめは、各種ソリューション企業と連携して行われた虎の門ヒルズでの実証実験で、太陽光パネルから電気をつくりスマートフォン等の充電が無料でできるソーラー充電スタンドや、屋外の夏の暑さをしのぐためのミスト、遮熱パネル等を用いたクールスポットの設置といったハード面での都市機能の向上を目指すものです。ふたつめは、MITメディアラボとの共同研究で、「見えないものを可視化するプロジェクト」と題された活動です。これは都市の養蜂を利用した都市環境の微生物の可視化や、ビル内空調HVACシステムを利用した微生物の可視化等に取り組むもので、微生物が都市に集まる人々のストレス緩和や、病気予防など、バイオ技術による都市環境の向上可能性を探求する新たなテクノロジーを用

いたまちづくりへの視点を提示し、同氏のインスピレーショントークが締めくくられました。

●加藤 貴弘さん(徳島県 政策創造部 地方創生局 地方創生推進課 発信戦略担当 係長 兼 総合政策課 広域行政担当 係長)

徳島県の政策全般の「共通コンセプト」として、平成 26 年 9 月に策定された「VS 東京」は、大都市の象徴である東京にない価値を「徳島の魅力」として発信するもので、徳島県が主導する取り組みです。加藤氏はそのリーダーとして、東京の企業のサテライトオフィスの誘致や、コンセプト動画のオンライン配信、ポスター等を通じた啓蒙など都市住民に地方の良さへの「気づき」を与えるとともに、徳島県民に郷土の豊かさへの「誇り」を再認識してもらうこと等を目的に、さまざまな活動を牽引しています。



いもどり葉っぱビジネスに代表される高齢者でもいきいきと働ける環境や、女性社長率が全国トップクラスであること、また青色 LED 発祥の地として世界を変えるイノベーションを生み出していることなど、徳島県の誇るさまざまな強みは、10 の「徳島宣言」としてまとめられています。なかでも、「おもてなし」のルーツといわれる「お接待」の文化は、四国八十八箇所の遍路めぐりをする人々に対して江戸時代に発祥したと言われ、日本国内のみならず、海外からも訪れる年間 15 万人の巡礼者に対して、今に息づく文化となっています。

おもてなしの歴史を紐解くと、第 1 次世界大戦期に、ドイツ軍捕虜を収容する板東俘虜収容所が徳島県に開設された際、徳島の人々は音楽会などのドイツの文化を捕虜の方々とともに楽しんだと言われています。今でも、ベートーベンの第九を徳島の地域の方々が歌う会が催されるなど、外部からの来訪者を受け入れ、ともに楽しい時間を過ごすという価値観が古くから根付いていることがわかります。

「お遍路さん」と呼ばれる巡礼者たちへの「お接待」も、同じく地域の住民が自然発生的に生み出したもので、遍路小屋と呼ばれるエイドステーション（休憩所）も徳島県内に 38 箇所設置されており、地域住民により建設、運営されています。誰でも自由に利用でき、地域住民から持ち込まれた飲み物や果物などが常時用意されている空間となっています。

また、この「お接待」の文化の現代的展開として「とくしまマラソン」開催時に、コースに隣接する地域の人々が、ランナーたちに飲み物や食べ物をふるまうというムーブメントが挙げられます。これも、マラソン主催者側の要請ではなく、住民の自発的な行動に端を発してスタートした新たな徳島の風物詩になっています。

最後に、加藤氏は、「遍路小屋」もマラソンコースの「おもてなしスポット」も、いずれも「おもてなしの提供者」と「サービスを受ける方」をつなぐ「場所」の構築であること

を示しました。また、これらの人と場所をつなぐための情報が重要であり、どこに、だれがいて、どこへ行くのかといった情報ネットワークの構築と的確な伝達が求められるであろうと指摘します。「おもてなしする方も、される方もうれしい、という考え方はどこの国にもないと言われている。おもてなしに息づく日本という国全体の文化が地域づくりにつながることできたらいいなと思う」と展望が語られ、同氏の発表が終了しました。

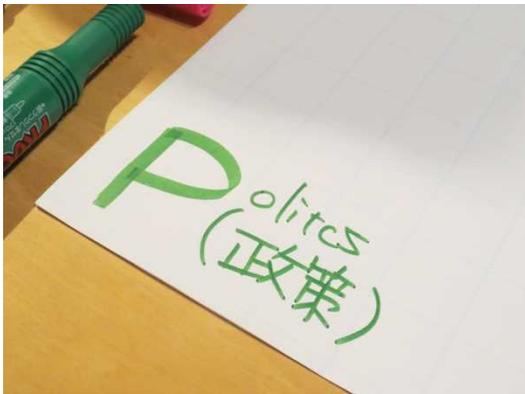
都市の未来を考えるにあたり、現在の東京だけにフォーカスするのではなく、日本に古くから根付く文化や価値観にも何らかのヒントがある可能性が示されたインスピレーショントークとなりました。



グループ対話2：「まちなかでの休む」に関わる、「2020年代までに起きる一過性ではない変化」は？

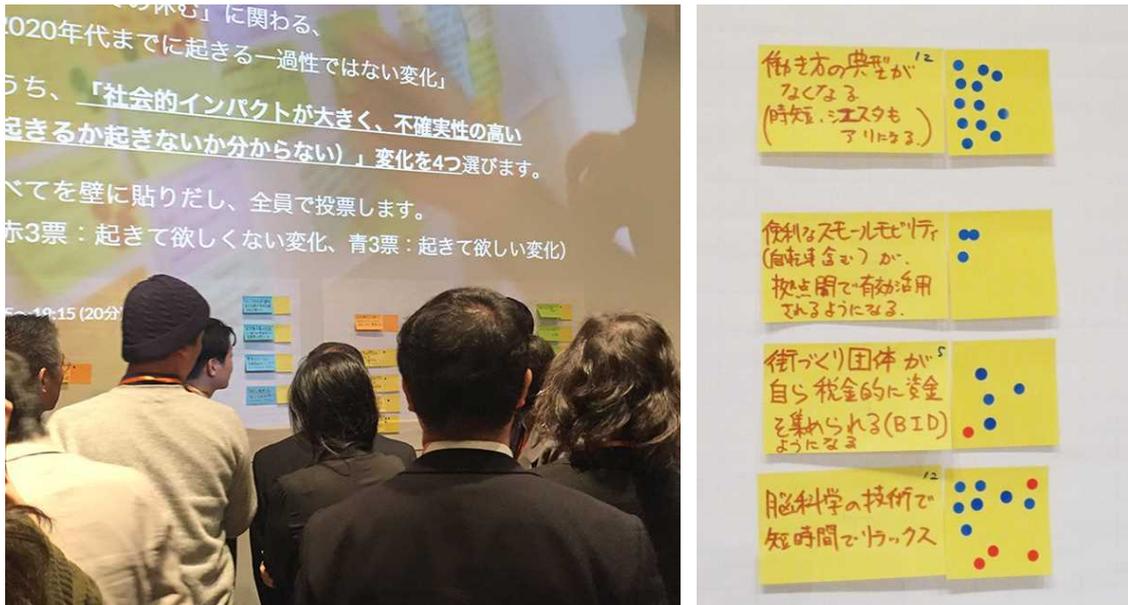
次に、グループ対話1で出された「まちにありうる変化」のなかから、「休む」に焦点を絞り込んで考えるワークが行われました。その際のヒントとして、①Politics（規制強化・緩和、税制の変化など）②Economy（産業、消費の変化など）③Society（教育水準、価値観の変化など）④Technology（テクノロジー）という4つの視点が提示され、グループごとにさらに対話が深められました。

さらに、より不確実性の高い変化、インパクトのある「ありうる変化」をグループごとに4つずつ選出しました。



ドット投票

各チームから選ばれた 4 つの「ありうる変化」を、壁面に貼り出し、全員で共有します。参加者には、赤・青のシールが配布され、赤＝起きてほしくない変化 青＝起きてほしい変化として、ひとり 3 票ずつ投票しました。そのうち、赤・青いずれでも投票数が多かった 11 個が「まちなかでの休む」に関わる変化の兆しとしてピックアップされました。



1.脳科学の技術で短時間でリラックスできるようになる (12 票)
1.働き方の典型が無くなる (時短・シエスタもあり) (12 票)
3.身体のパーツか、交換可能かでこれまでの休憩が不要になる (10 票)
4.おもてなし評価表彰制度ができる (9 票)
5.庭先カフェの開業が簡単になる (8 票)
5.シェア文化が進みまち全体で休める場所が増える (8 票)
5.同じ空間でも、時間・曜日・休日で利用目的を自由化できる法律 (8 票)
8.寝れるレベルの安心安全なおやすみところを探しやすくなる技術
9.まちづくり団体が自ら税金的に資金を集めるようになる (BID) (5 票)
9.癒しのロボットが増える (5 票)
9.ビルに農園 (宅配あり) (5 票)

↑ 「まちなかでの休む」に関わる変化の兆し ドット投票結果

【未来を構想する】

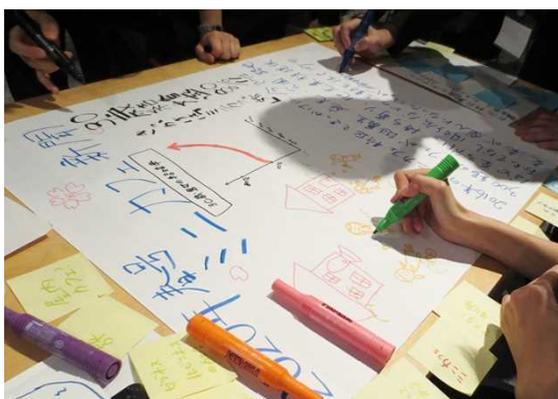
マグネットテーブル

次に、選び出された 11 の変化の兆しを受けて「2020 年代までに『まちなかでの休む』はどのように『楽しみやすく』なるだろうか？」という問いに対するアイデアを参加者ひとりひとりが、A4 用紙に書き出しました。そして、書かれた用紙を持ち会場を歩き回り、書いていることが近い、化学反応が起きそう、自分のアイデアを捨てても一緒になりたい、という 3 つの観点で一緒になりたい人を探して新しいグループ作りが行われました。結果、4~5 人からなる 7 つのグループが再結成されました。



ストーリーテリング&未来編集会議

新たに結成されたメンバーは、まずそれぞれが書いたアイデアを共有しながら、グループとしてのアイデアをひとつにまとめていきます。そして、最後のグループワークとして、「まちなかでの休むが楽しみやすくなっている」成功状態を描き、その取り組みが未来のメディアに掲載されると想定して作成する媒体づくりに取り組みました。グループのアイデアを体現できる媒体名や掲載日を想定し、ニュースを感動的に伝える見出しや、成功状態の根拠などとともに、詳細記事に至るまで、メンバーで意見を出し合い、ペンを握って分担しあいながら、模造紙に自由に書き込み仕上げていきました。



そして、完成した紙面を会場の前方に張り出し、それぞれ 1 分程度でのプレゼンテーションを行いました。

■ドキドキ未来新聞（2019年4月2日）

首相官邸が庭先カフェに！



東京都一万店突破、おもてなしはお庭から一オープンな街づくりをめざし、都が進めてきた庭先カフェ推進事業が大きく花開いてきた。庭先カフェは一般の家庭が簡単な手続きで開業できるもの。これにより街の緑化、異文化コミュニケーションが可能となり、活気あふれる「美しい東京2020」への大きな一歩となる。開業支援サービスも充実。

各種規制緩和もセキュリティ面で安心一心配されていたセキュリティの問題も新しいオンライン身分認証システムにより解消された。これはカードリーダーにかざすだけで利用者也店も安心して確認できるもの。また庭先カフェマップとも連動しており、人と人のつながりも見直されるきっかけとなっている。首相自らも、庭先カフェに賛同し、首相官邸をカフェとして一般解放したり、庭先カフェ団体とマッサージ協会がタイアップして電子スタンプで10箇所回るとコーヒー無料券、20箇所マッサージ券がもらえるといった独自サービス拡充も登場するなど、さまざまなムーブメントが起こっている。外国人観光客にも好評で、トイレのお休みどころとしても活用されている。

■日本なまけもの新聞（2020年7月24日）

“なまけもの”特区として BID 制度を活用し、都民の休憩時間と健康増進に貢献



東京が世界に先駆け“なまけもの”パラダイスへ！！—2017年頃から発生した世田谷区の庭先カフェの流行と、都内IT企業が推進する「なまけものワークスタイル」の浸透が契機となり、都心5区で「なまけもの特区」が今年7月に認定された。まち単位で休憩場所の確保の原資を BID により資金調達し、休憩スペースを設置運営できるようになった。かつてエコノミックア

ニマルといわれた日本人も世界を代表する“なまけもの”と言えるようになった。

※BIDとはまちづくり団体が徴税権を持ち、地域の清掃・警備・イベントなどを実行する制度のこと。

■DAILY OMOTENASHI (2020年8月10日)

スマートナック都内に続々！新たな休憩形態か！？



新たな休憩形態か／五輪を機に早くも

100店舗一休憩・休息を求める市民が出資金を出し合い、ビジネス街を中心にシェア空間を開設。電子アカウント付きメンバー管理と、マッチング感情情報共有機能が外国人旅行者に人気を集めている。

これらは徳島県が四国巡礼のお遍路さんをもてなす「お接待」を実証研究対象とし、知らない相手ともすぐに仲良くなれたという体験や、コミュニケーションそのものが疲労を除去する効果が証明されたことをヒントにサービス開発されたもの。まさに場末の「ナックのママ」によるおもてなしと、そこに集うサラリーマンたちの憩いの場を現代的なスマート空間としてよみがえらせたことが人気の秘密と言えそうである。

のが疲労を除去する効果が証明されたことをヒントにサービス開発されたもの。まさに場末の「ナックのママ」によるおもてなしと、そこに集うサラリーマンたちの憩いの場を現代的なスマート空間としてよみがえらせたことが人気の秘密と言えそうである。



各グループが未来を構想して作成したメディア紙面

このほかのグループからは、「移動中も休憩可能で乗っているだけで癒される、自動運転型パーソナルモビリティが出現する」「庭先、公園、路地をカフェ化することで街の交流がひろがり、既婚率が上がる」「休息が労働生産性を高める脳科学研究結果から休日規定をなくし、いつでもどこでも休み働ける社会が実現」といった様々な未来構想が発表されました。庭先カフェに代表されたように、私有地を共有スペースにするシェアの思想や休むスペースに集う人同士のコミュニケーションを重視したアイデアのバリエーションがみられるなかで、それらを実現するための利用者の認証システムや空室状況の可視化など、テクノロジーの活用可能性への示唆も共有されました。

これらのアイデアを受け、ファシリテーターを務めた野村は、ワークショップ全体を通じて「現実的に考えると休む場所をどうやって作るかという発想になるところを、休むという概念そのものが変わるようなテクノロジーの変化もあるのではないかということが見えてきたと思う」と指摘しました。また、全3回に渡り、まちなかでの「移動」「捨てる」「休む」を考えてきた、本ワークショップシリーズの各回のアイデアを組み合わせると、さらに面白いアイデアが出てくるかもしれないと期待を述べました。

さらに、「もう一度すべてのアイデアを整理した形で発信しつつ、みなさんと実現に向けた活動、たとえばアイデアソン、ハッカソンをみんなでやってみるといった、活動に発展させていけたらいいなと思います。この活動の一番良いところは、出てきたアイデアを共有するところにあります。誰かひとりが責任を持ってやるのではなく、またみんなが集まって、一緒にやろうというような主体的なコミュニティとして続いていくことが一番目指すべきことかなと思います」と自身の感想を締めくくりました。

チェックアウト

最後に、ワークショップの締めくくりとして、参加者全員が輪になり一言ずつ感想や気づきを語りました。

- 2020年を待たずして、ミニカフェを実現して自分自身も楽しみたい
- 休む側だけではなくて、休ませる側から考えると面白いと気づいた
- 休む場所や空間から、人と人とのコミュニケーションを考えるように変化した
- 休むことだけは最後の砦として、自分が選択できる自由を持ち続けたいと思う
- 人と人との縁を結ぶので、縁側と呼ばれる空間があった。まさに休むことは縁側である
- まちなかで簡単に休めないのはコミュニケーションの仕方が変わってきているからだろう。技術で昔ながらのコミュニケーションが戻るといいなと思う
- 癒しの場所は、スポンジの中にある気泡のように、都市の中に多く遍在できる可能性があると感じた



また、ワークショップ主催者である南は、「IT 業界だけではなくいろんな業界の方々にテクノロジーの可能性を課題解決型の思考で考えてもらうことがイノベーションを生み出すきっかけになると考えている。ぜひ、ここで出たアイデア、ご意見は参加者のみなさんで持ち帰って、ご自身で広げて頂けたらと思います。そして一緒に日本を盛り上げていきましょう」と述べました。

続けて庄司は、「Innovation Tokyo と題した 3 回のワークショップを通じてテクノロジーができることを改めて考えてきた。今回は、いろいろな業界の方々にご参加いただいたことでアイデアに深みが生まれたと思う。そして、これらのアイデアは、Innovation Nippon プロジェクトとして、今後もいろいろな側面で継続して取り組んでいきたい。ぜひ、今後の活動にもご参加いただきたい」と挨拶し、全 3 回のワークショップを締めくくりました。

「Innovation TOKYO for 2020 and beyond」シリーズは「まちなかでの移動」「まちなかでの捨てる」「まちなかでの休む」をテーマに、のべ 97 名の多様な参加者による対話を通じて、新たなイノベーションのアイデアと、参加者同士のつながりを創出することを成果として残し、2015 年の活動を終了しました。今後の活動も、これらの成果を活かしながら、継続して Innovation Nippon プロジェクトとして進行していきます。